

厚生労働省 平成 29 年度子ども・子育て支援推進調査研究事業

多胎育児家庭の虐待リスクと 家庭訪問型支援の効果等に関する 調査研究報告（概要版）

—全ての多胎育児家庭に家庭訪問型支援を—



JAMBA

一般社団法人 日本多胎支援協会
(JAMBA : Japan Multiple Births Association)
ホームページ : <http://www.jamba.or.jp>



本書は「厚生労働省 平成 29 年度子ども・子育て支援推進調査研究事業 多胎育児家庭の虐待リスクと家庭訪問型支援の効果等に関する調査研究報告書」の概要版です。

本調査研究の背景とねらい

多胎妊婦はハイリスク妊娠として医療による健康管理が行われていますが、多胎育児についての具体的なイメージをもって育児に臨むための支援は多くありません。多胎育児家庭の多くは、多胎妊娠中に体力が低下し、それが回復しないうちに小さく生まれた子どもたちの育児が始まります。それがどれほど心身に負担をもたらすものであるのかは想像に難くありません。育児の過酷さから母親は地域から孤立する傾向があり、多胎育児家庭の虐待死も単胎育児家庭と比べて 2.5 ～ 4.0 倍と指摘されています。

このような状況の多胎育児家庭にとって、支援者が出向く「訪問（アウトリーチ）型支援」は、不可欠な支援形態といえるでしょう。多胎育児家庭への訪問支援者は、多くの場合、医療専門職（保健師、助産師）です。多胎特有の妊娠経過や産後の育児に対応する専門職の関わりはとても重要です。

しかし多胎育児家庭が望んでいるのはそれだけではありません。専門職と連携しながら、同様の状況乗り越えてきた多胎育児経験者や受容的な子育て支援者、多胎家庭の状況を理解し多胎児の兄弟にも配慮してくれる家事・育児ヘルパーなど、さまざまな形態の訪問支援により、母親や家族の気持ちの回復をはかり、身体的な負担感を軽減することを期待しています。

本研究では、このような「多胎育児家庭の現状の課題」と「訪問型支援ニーズ」を具体的に明らかにし、多胎育児家庭の虐待リスク軽減の支援に寄与する「先進的な訪問型支援」の具体的な方法と効果を参考に、多くの地域で実現可能な家庭訪問型支援のバリエーションを提案いたします。

これらの普及により、全国の多胎育児家庭が安心して子育てできる社会になることを願っています。

「調査研究報告書」と「概要版」について

本研究では、現在までの先行研究（調査研究報告書「第1章 多胎家庭の現状と虐待防止のための支援」）を踏まえ、全国各地の多胎サークルリーダー等に対してヒアリング調査を行いました。「第2章 調査研究の目的と方法」「第3章 多胎育児家庭の困難感」「第4章 多胎育児家庭の家庭訪問型支援ニーズ」「第5章 多胎育児家庭の困難感と家庭訪問型支援ニーズについての形態素解析」に調査結果の報告があります。さらに「第6章 多胎育児家庭に対する家庭訪問型支援の先進事例」として、各地の先進事例について行政や民間団体にヒアリング調査を行った結果を報告し、「第7章 多胎育児家庭への家庭訪問型支援に関する考察と提言」をまとめました。

報告書は以下の WEB アドレスに PDF で掲載しています。下記の QR コードから WEB アドレスにもつながりますので、ぜひご覧ください。

一般社団法人日本多胎支援協会（JAMBA）

厚生労働省 平成 29 年度 子ども・子育て支援推進調査研究事業

「多胎育児家庭の虐待リスクと家庭訪問型支援の効果等に関する調査研究事業」報告ページ

<http://jamba.or.jp/booklet/kodomokosodate/>



調査研究の内容

多胎育児家庭の困難感

「多胎育児家庭の困難感」について、1. 多胎妊娠から出産、多胎児が退院するまで、2. 多胎児の退院後から4か月まで、3. 4か月以降1歳未満まで、4. 1歳代、5. 2～3歳代の5つの時期に分けてヒアリングしました。語りの文脈の意味・内容を損なわないように逐語録を要約し、多胎育児の困難感の特徴を抽出し、類似している「語り」を質的に分類しカテゴリーにまとめました。

多胎育児家庭の家庭訪問型支援ニーズ

「多胎育児家庭の家庭訪問型支援ニーズ」については、誰に、どのような訪問支援をしてもらうことが有効かを、上記と同様の各時期別に逐語録からまとめました。

支援者（誰に）については、1）出産病院の医師、保健師、助産師、看護師 2）地域行政などの保健師、助産師、栄養士などの専門職 3）家事ヘルパー・育児ヘルパー 4）地域の子育て支援者 5）多胎ピアサポーター、多胎育児経験者、多胎サークル 6）その他（地域のボランティア、育児経験者）に分類しました。さらに、当多胎支援協会の考察を加えて、必要とされる支援を支援者別・時期別に表記しました。

多胎育児家庭に対する家庭訪問型支援の先進事例

多胎育児家庭の特別なニーズに応えるために、先駆的な訪問型支援を実施している自治体、医療機関、専門職団体、子育て支援団体の9事例に面接調査を行いました。

調査の対象としたのは、実施主体別に、A. 行政主体の支援、B. 行政が主体となって当事者と連携する支援、C. 当事者団体と医療・行政が連携する支援、D. 民間の支援団体が主体の支援です。

調査の
結果からの
提言

既存の行政事業から拡充したい
多胎育児家庭への訪問型のバリエーション

1. 多胎プレパママ教室、出産病院への多胎育児経験者の訪問
2. 保健師等と子育て支援者や多胎育児経験者等の同行訪問
3. 健診・予防接種等への同行サポート
4. 保健センターや地域子育て支援拠点等における両親学級や子育て教室等への外出・同行サポート等
5. 助産師の訪問
6. 個別支援訪問・ピアサポート訪問
7. 予防的な視点での積極的な家事支援・育児支援・保育・一時預かりの提供

多胎育児家庭への訪問型支援 ～時期別の困難感と求められる支援内容～

時期	多胎妊娠から出産、多胎児が退院するまで	多胎児の退院後から4か月まで
	妊娠継続のための配慮や環境の調整	自宅での育児の開始
主な困難感 望まれる訪問支援者と支援内容 求められるスキル	● 多胎妊娠を知った時の戸惑い ● 医療職の説明不足や配慮の無さによる不安 ● 長期入院や安静に伴う不安や困難 ● 多胎出産に関する不安全感や不安 ● 同じ立場の人との出会いの少なさや情報の無さによる問題 ● 家族や周囲の不安や理解不足、経済的不安 ● 産後の母体や多胎児の状態による困難さ	● 体力が回復していない段階での育児行動の開始 ● エンドレスで波動的な育児に、母親が精神的に追い詰められ壊れそう ● 多胎児の授乳困難と発育への不安 ● 多胎児の泣き声と母親の自責の念 ● 父親の自覚と協力の無さ、兄弟の育児ができない、祖父母に関するジレンマ
出産病院の医師、助産師、看護師、保健師など 多胎妊娠・出産・育児の特性を踏まえ、医療的なサポートだけでなく地域の多胎育児経験者や子育て支援等と連携した支援	・ 安静のアドバイスや多胎と単胎の違いについてのレクチャー ・ 多胎サークルや利用できる制度の紹介 ・ 医療専門職と多胎育児経験者によるプレママパパ教室の開催	・ NICU 看護師による退院後の多胎児の健康状態の確認
自治体などの保健師、助産師、栄養士など 多胎育児の特性を踏まえた専門的なサポートや、多胎育児の経験者、地域資源、利用できる制度への積極的なつながり	産褥期および NICU 入院中に、保健師訪問による ・ 行政手続きなどの説明 ・ 地域の制度の紹介 ・ 出産後の子育て支援拠点や多胎サークル、多胎育児経験者の紹介など	・ 地域の助産師による乳房マッサージや、多胎児特有の授乳方法などの指導 - 行政の保健師による ・ 多胎児の発育・発達の確認 ・ 母親のこころの健康を保つケア ・ レスパイトできる支援制度の紹介 ・ 研修を受けた地域の子育て経験者や多胎育児経験者（ピアサポーター）の同行訪問
家事ヘルパー・育児ヘルパー・ベビーシッター ハイリスクな多胎妊娠・出産・育児の特性を理解し、受容的・傾聴的な姿勢でのサポート	・ 重いつわりの時や切迫早産予防、自宅安静のための、掃除・片付け・買い物などの家事支援と外出サポート ・ 切迫早産予防や自宅安静時の多胎児の兄弟の育児支援 ・ 多胎児が NICU 入院時の場合、両児入院の場合は面会時の同行や兄弟の世話など、一人入院の場合は一人は居家で託児など	・ 外出時の同行や買い物の代行、食事の用意や清掃などの家事全般の代行 ・ 居宅での一時的な託児や沐浴などの育児サポート ・ 兄弟の送り迎えや遊び相手、夜の育児支援 ・ 母親がレスパイトできるケア
地域の子育て支援者 ハイリスクな多胎妊娠・出産・育児の特性を理解し、地域のなかのスペシャルニーズをもつ育児として、妊娠期からの継続的なサポートの構築、受容的・傾聴的な姿勢でのサポート	・ 子育て支援拠点などでの、医療専門職や多胎経験者を交えての多胎妊婦教室の開催（父親や祖父母への情報提供や地域交流	・ 気持ちの寄り添いや喜びの共有、話し相手 ・ 自宅と一緒に考えながら育児サポート ・ 自宅で親子で遊べる遊びを提案 ・ 健診や予防接種などのサポートや同行 ・ 公園などへの外出同行やコソを一緒に考える
多胎サークル・ピアサポーター・多胎育児経験者 地域の病院や行政担当課と連携し、研修を受けた上での当事者性を活かしたサポート活動	(※1) ・ 医療専門職と連携し、母親だけでなく父親や祖父母への多胎妊娠・出産・育児に関する情報提供や地域交流 ・ 多胎育児のノウハウや準備品、育児情報の提供 ・ 多胎妊婦への外出サポート、寄り添い ・ 多胎ママやパパの仲間作り	・ 専門職との同行訪問 ・ 多胎育児スキルの伝授 ・ 生活環境のアドバイスや家事サポート ・ 健診サポートや外出サポート ・ 母親の話を傾聴
その他（地域のボランティア、育児経験者など） 子どもを可愛がり親と共に多胎育児を楽しむ気持ちや、日常生活の中での声掛け	・ 母親の不安な気持ちを受け止める ・ 早産予防や安静時に必要なものなどを届ける ・ 多胎児が NICU 入院中の場合、母乳などの運搬代行やタクシーの無料サービス	・ 沐浴の手伝い ・ 業者の玄関先までの配達 ・ 外出時のお手伝い ・ 母親や兄弟へのちょっとした声掛け ・ 子どもを母親と一緒に見守る ・ 買い物などの代行

(※1) 本報告での「ピアサポーター」とは、多胎の妊娠出産育児を経験し、傾聴や寄り添いなどの支援のための研修を受講した者をさす。

4か月以降 1歳未満まで	1歳代	2～3歳代
里帰りや身内の支援の終了	子どもたちの身体能力の高まり	子どもたちの自我の芽生え
● 睡眠不足と疲労の蓄積 ● 母親の孤立・孤独感と不全感 ● 母乳哺育や離乳食に関連したストレス ● 多胎児の泣き声などで精神的に追い詰められ虐待寸前 ● 多胎児を連れての外出困難 ● 父親の協力の無さ、兄弟の育児ができない、祖母に関するジレンマ ● 多胎育児の事故発生リスク	● 疲弊して追い詰められ虐待寸前 ● 外出困難と孤立感 ● 余裕のない多胎育児や偏愛に対する自己嫌悪 ● 子ども達の心身の発育や自我の発達に伴う困難 ● 病気や入院に伴うストレス ● 多胎育児の経済的問題と母親の就労 ● 行政サービスの不備やミスマッチに関するストレス	● イヤイヤ期の多胎児を抱えるストレス ● トイレトレーニングのストレス ● 目が届かず、外出困難や集団の場に入れない母親の疎外感や孤立感 ● 多胎児どうしの関係を調整するストレス ● 多胎児どうし、あるいは単胎児との発育発達の差の悩み ● 家族関係の緊張と子育てを振り返っての後悔
・ 自宅での多胎児の健康状態の確認や健康診査		
・ 二人同時に進行する離乳食の指導 ・ 多胎児の睡眠リズム夜泣きなど個別具体的な相談 ・ レスパイトできる支援制度の紹介 ・ 研修を受けた多胎育児経験者（ピアサポーター）の同行訪問	・ 多胎児の発達差に対する保健師のアドバイス ・ 二人同時に進行する離乳食の指導 ・ 多胎児の睡眠リズム、夜泣きなどについての相談 ・ 母親の心理的な健康状態の確認、カウンセリングなど精神面での専門的関わり ・ レスパイトできる支援制度の紹介	・ 多胎児の発達や育児に関する専門職との相談 ・ 言葉の問題、歩き方など発達に関する相談 ・ 食事の進め方など家庭環境にあった育児相談 ・ 子どもへの声かけやしつけなどの育児相談
・ 外出時の同行や買い物の代行、食事の用意や清掃などの家事全般の代行 ・ 居宅での一時的な託児や沐浴などの育児サポート ・ 兄弟の送り迎えや遊び相手、夜の育児支援 ・ 病院への受診サポート	・ 母親が一人で外出するための居宅での一時的な託児 ・ 公園や買い物、受診・健診など外出時の同行 ・ 買い物の代行	・ 買い物に同行、公園への同行 ・ 兄弟の相手や授業参観時に多胎児の保育
・ 母親がレスパイトできる訪問 ・ 家庭での遊びを提案 ・ 予防接種、健診、受診などのサポートや同行 ・ 公園や買い物などへの外出時の手伝いや同行 ・ 兄弟の見守りや遊び相手 ・ 母親が見落としがちな多胎児個々の魅力を発見	・ 予防接種、健診、受診などのサポートや同行 ・ 公園や買い物などへの外出時の同行 ・ 兄弟の見守りや遊び相手 ・ 集まれる場づくり	・ トイレトレーニングやイヤイヤ期のアドバイス ・ 育児の不安への相談 ・ 公園や買い物などへの外出時の同行 ・ 集まれる場づくり
・ 自分でできる方法を一緒に考えてくれるピアサポーター ・ 専門職との同行訪問 ・ 一緒に過ごす、傾聴、相談、助言など ・ 経験に基づいたお風呂の介助や家事支援、離乳食に関するアドバイス ・ 予防接種や通院、多胎サークルへの外出サポート	・ 受診や健診のサポート、外出サポート ・ 先輩ママやピアサポーターによる傾聴 ・ 年上の子ども達の成長を見るための母子訪問 ・ 子どもとのかかわり方や遊び方 ・ 多胎児の母親を対象とした育児教室への誘い ・ 多胎家庭での家事支援や子連れ訪問	・ 多胎育児ならではのトイレトレーニングやしつけ相談 ・ 先輩ママやピアサポーターによる傾聴 ・ イヤイヤ期の子ども達への対応や外出支援
・ 母親や兄弟へのちょっとした声掛け ・ 子どもを母親と一緒に見守る ・ 買い物などの代行	・ 外出時や在宅での支えや見守り ・ 母親や兄弟へのちょっとした声掛け ・ 子どもを母親と一緒に見守る ・ 買い物などの代行	・ 外出時や在宅での支えや見守り ・ 母親や兄弟へのちょっとした声掛け ・ 子どもを母親と一緒に見守る ・ 買い物などの代行

多胎育児家庭への訪問型支援 ～困難感とそれに対応する先進事例～

時期	多胎妊娠から出産、多胎児が退院するまで	多胎児の退院後から4か月まで
	妊娠継続のための配慮や環境の調整	自宅での育児の開始
主な困難感	● 多胎妊娠を知った時の戸惑い ● 医療職の説明不足や配慮の無さによる不安 ● 長期入院や安静に伴う不安や困難 ● 多胎出産に関する不安全感や不安 ● 同じ立場の人との出会いの少なさや情報の無さによる問題 ● 家族や周囲の不安や理解不足、経済的不安 ● 産後の母体や多胎児の状態による困難さ	● 体力が回復していない段階での育児行動の開始 ● エンドレスで波動的な育児に、母親が精神的に追い詰められ壊れそう ● 多胎児の授乳困難と育児への不安 ● 多胎児の泣き声と母親の自責の念 ● 父親の自覚と協力の無さ、兄弟の育児ができない、祖父母に関するジレンマ
各地の先進事例		
事例1 滋賀県大津市 「多胎児家庭育児支援事業」		多胎児の誕生から3歳前日まで無料で120
事例2 埼玉県川越市 「第三子及び多胎児産前産後ヘルパー派遣事業」	多胎妊娠から産後1年まで、無料で64回利用できる、ヘルパー派遣事業	
事例3 兵庫県宝塚市 「多胎ファミリー・健診サポート」		ピアサポーターによる無料の乳幼児健診
事例4 福岡県久留米市「多胎妊産婦（家庭）のための産前・産後サポート事業」	妊娠中から産後4か月前日まで、無料で自宅や病院で受けられるピアサポート訪問	
事例5 NPO法人ぎふ多胎ネット（岐阜県） 「ピア家庭訪問・個別訪問」	ピアサポーターが、妊娠期から子育て期まで多胎家庭に出向いて個別に支援	
事例6 地方独立行政法人岐阜県立多治見病院（岐阜県多治見市）「病院サポート訪問」	ピアサポーターが出産病院に訪問し、育児のイメージづくりや仲間づくりを支援	
事例7 岐阜県多治見市「こんにちは赤ちゃん訪問時のサポーターの同行訪問事業・健診サポート事業」		ピアサポーターが保健師等の訪問時に同行するとともに、
事例8 京都府助産師会（京都府） 「多胎妊婦・産後家庭訪問」	助産師の専門性を活かし、多胎妊産婦のニーズに応えた訪問の支援	
事例9 認定NPO法人おやこの広場あさがお（石川県白山市）「訪問型子育て支援ホームスタート」	地域から孤立しがちな子育て家庭を、傾聴と協働で支える地域ボランティアによる訪問型子育て支援	

A. 行政主体の支援

先進事例1 滋賀県大津市 「多胎児家庭育児支援事業」

所得制限のない無料のサービスとして、家事育児ヘルパーを利用できる。利用促進のため、周知が徹底して行われ、電子申請も可能にするなどの配慮がある。利用率は、例年約2割である。国の交付金を利用し、利用料や所得制限をなくすことで事務作業負担も少なくなっている。

A. 行政主体の支援

先進事例2 埼玉県川越市 「第三子及び多胎児産前産後ヘルパー派遣事業」

妊娠期から生後1年間、所得制限がなく無料で64回利用できる。安静が求められる多胎妊婦が利用しやすい。利用者の申し込み方法がシンプルであり、事業者の紹介を担当課が担うことで、利用者の負担が少ない。ヘルパーの支援内容が柔軟で利用可能回数は多いが、利用限度の全回数利用者は1～2割程度である。十分な支援が保障されていることは、安心感から自立につながることを示している。

B. 行政が主体となって当事者と連携する支援

先進事例3 兵庫県宝塚市 「多胎ファミリー・健診サポート」

所得制限のない無料のサービスとして、4か月児、10か月児、1歳6か月児健診の場でピアサポーターがサポートする。市が当事者団体に呼びかけ、協働して健診サポートという事業をおこした。これにより、多胎家庭の健診未受診率を下げ、多胎家庭の健診場面の心身の困難感が軽減され、多胎育児の先輩とも繋がって相談相手の獲得もできるという、多面的な効果を得ている。利用希望者は、ひょうご多胎ネットに申し込む。

B. 行政が主体となって当事者と連携する支援

先進事例4 福岡県久留米市「多胎妊産婦（家庭）のための産前・産後サポート事業」

行政と医療機関、当事者団体の三者で多胎家庭を支援する仕組みである。産前サポートとしては自宅や総合周産期母子医療センターへのピアサポーターによる訪問、産後サポートとしては保健師の新生児訪問にピアサポーターが同行する家庭訪問等を行う。妊娠期から多胎家庭と育児経験者の接点をもて、効果的な情報提供や仲間づくりの機会としている。新生児訪問時のピアサポーターの同行訪問は、ほぼ全数に近い利用率となっている。所得制限のない無料のサービスで、経費は国の交付金を利用している。

4か月以降1歳未満まで	1歳代	2～3歳代
里帰りや身内の支援の終了	子どもたちの身体能力の高まり	子どもたちの自我の芽生え
● 睡眠不足と疲労の蓄積 ● 母親の孤立・孤独感と不全感 ● 母乳哺育や離乳食に関連したストレス ● 多胎児の泣き声などで精神的に追い詰められ虐待寸前 ● 多胎児を連れての外出困難 ● 父親の協力の無さ、兄弟の育児ができない、祖母に関するジレンマ ● 多胎育児の事故発生リスク	● 疲弊して追い詰められ虐待寸前 ● 外出困難と孤立感 ● 余裕のない多胎育児や偏愛に対する自己嫌悪 ● 子ども達の心身の発育や自我の発達に伴う困難 ● 病気や入院に伴うストレス ● 多胎育児の経済的問題と母親の就労 ● 行政サービスの不備やミスマッチに関するストレス	● イヤイヤ期の多胎児を抱えるストレス ● トイレトレーニングのストレス ● 目が届かず、外出困難や集団の場に入れない母親の疎外感や孤立感 ● 多胎児どうしの関係を調整するストレス ● 多胎児どうし、あるいは単胎児との発育発達の差の悩み ● 家族関係の緊張と子育てを振り返っての後悔
時間利用できる家事・育児支援や健診などの外出もサポート		
サポート		
本報告での「ピアサポーター」とは、多胎の妊娠出産育児を経験し、傾聴や寄り添いなどの支援のための研修を受講した者をさす。		
乳児健診時に無料で支援		
て支援		

C. 当事者団体と医療・行政が連携する「多胎支援ネットワーク」での訪問支援

先進事例 5 NPO 法人ぎふ多胎ネット（岐阜県）「ピア家庭訪問・個別訪問」

NPO 法人ぎふ多胎ネットの支援。訪問希望のある多胎家庭にコーディネーターとピアサポーターが訪問し、傾聴と情報提供によって、育児の見通しが持てる支援を提供する。

先進事例 6 地方独立行政法人岐阜県立多治見病院（岐阜県）「病院サポート訪問」

病院が NPO 法人ぎふ多胎ネットに委託。ピアサポーターが、病院の外来や病棟の多胎妊婦を訪問する場を毎月 1 回設けている。多胎妊婦は利用料無料。不安な気持ちの受け止めや具体的な情報提供を目的としている。病院スタッフは、多胎妊婦へピアサポーターの紹介と専門的な質問に対応する。

先進事例 7 岐阜県多治見市「こんにちは赤ちゃん訪問時のサポーターの同行訪問事業・健診サポート事業」

多治見市が NPO 法人ぎふ多胎ネットに委託。「こんにちは赤ちゃん訪問」では、保健師の専門的支援とピアサポーターの生活面のサポート、「健診サポート事業」は、健診時にピアサポーターが駐車場から健診の全行程に同行しサポートする。同行によって母親の身体的困難の軽減ができ、不安の傾聴と情報の提供ができる。未受診を防ぐことにも寄与している。

D. 民間の支援団体が主体の支援

先進事例 8 京都府助産師会「多胎妊婦・産後家庭訪問」

「多胎妊婦・産後家庭訪問」として、助産師という専門性を生かした支援を有償で提供している。多胎産婦の特別なニーズにきめ細かに応え、同時授乳等の授乳指導をはじめ、母体の回復に問題のあるケースには託児をして母親の睡眠時間を確保するなど、その支援は「指導」にとどまらず、本当に必要とされている支援を提供することで育児不安や育児困難感、孤立感の軽減を図っている。

D. 民間の支援団体が主体の支援

先進事例 9 石川県白山市 認定 NPO 法人おやこの広場あさがお「訪問型子育て支援ホームスタート」

地域子育て支援拠点事業者等が運営する訪問型子育て支援ホームスタート。研修を受けた地域のボランティアが無料でホームビジターとして定期的に家庭を訪問し「傾聴（お話を聴く）と協働（一緒に過ごす、家事や育児をする）」をする。訪問対象は 6 歳未満の子どものいる家庭で、訪問支援するホームビジターは、必ずしも多胎児の母親ではない。

厚生労働省平成 29 年度子ども・子育て支援推進調査研究事業
多胎育児家庭の虐待リスクと家庭訪問型支援の効果等に関する調査研究

**既存の行政事業等を拡充し、専門職の訪問にとどまらず、
地域の子育て支援者や多胎育児経験者との連携と協働によって、
全国全ての多胎妊婦・多胎育児家庭に対して、訪問（アウトリーチ）型支援を行う**

